俳句雑誌

空

2019・10・11

SORA 87号

空　令和元年11月30日発行　第17巻3号　通巻第87号

三十六句

柴田佐知子

銀漢へ悪女が髪を梳き流す
血統書なくて花野の馬となる
大地ごと乾きし種を採りにけり
日焼子を犬が主と認めし日
火に溺れ翅失ひし火取虫
尋問のやうな告白カラジューム

―「俳句界」九月号より―

水打つて戻りし家の暗さかな
白雨くる母との昼餉ゆつくりと
打掛のごとひるがへる金魚かな
涼しくて恋の傷さへ懐かしき
茹で上げしごとき赤子や天瓜粉
西瓜割り声に押されて歩き出す
稜線の一重に暮るる盂蘭盆会
生身魂衣の内に戦傷
塵となる身を存分に踊りけり
八朔や何でも掛くる土間の釘

泣き通す子供の力葉鶏頭
水平な軌道を重ね鬼やんま
草もみぢ一等賞の牛連れて
広すぎる花野に魂をとられけり
鰯雲より下りてくる牛の群
ぎす鳴くや闇となりゆく物の影
猪罠をかけたる山の押し黙る
月光を返し獣の目のあまた
山崩すほどに暴るる檻の猪
水に身を打ちつけて鮭上りゆく

おほかたの思慕伝はらず草の花
洋上はいつもがら空き鰯干す
岬ごと絞り上げたる鷹柱
秋夕焼潟に刺さりしやうな舟
沖に手をかざせば指も不知火に
不知火の沖見る躰消えてゆく
秘して来しことも茫々秋のセル
羽根ペンに月の光の集まれり
人在れば人骨残り星月夜
地の底に水や炎や鷹渡る

—「俳壇」十月号より—

福岡　高倉和子

稜線に雲の落ち着く秋気かな
秋の水絹のごとくに流れけり
口笛のやがて風音夕花野
秋草の揺れ通しなる祠かな
雨のあとふくらんでゐる菌山
満月や井戸に震へる水のあり
猫の目の光る床下そぞろ寒
堰越ゆる魚のきらめく豊の秋

東京　中田みなみ

病める掌に星逢ふ夜の化粧水
鬼灯の虫喰網目闘病記
束の間の砂の足跡秋高し
食卓の椅子に骨壺月昇る
妹いま銀河鉄道虫すだく
穭田の列の生真面目亡き人も
兵児帯の黄の思ひ出や蒸し藷
数珠玉や野川挟みてまた明日

福岡　柴田志津子

子を連れし鹿が遠くで振り返る
勉学の思ひは今も初嵐
本めくる音に猫来る夜長かな
倒されし稲田を巡るゴム草履
祭神の分からぬ祠秋の蝶
病室の窓を流るる渡り鳥
秋深し病院食にやや飽きて
善悪の境うするる日向ぼこ

長崎　荒井千佐代

きりもなき湾のさざなみ菖蒲にも
汝とわれの影の重なる菖蒲かな
竜淵に潜み漣きりもなし
石垣に城の史を見る早稲の風
宗麟の逝きし日か鵙猛りをる
武家屋敷過ぐや真昼の酔芙蓉
神父さま在すかに草の花ひとつ
磨崖仏遠しひかがみまで穂草

PDF= 俳誌の salon

福岡　岸　洋子

夏越の輪くぐりさそり座くぐりけり
滴りの岩くろぐろと祠神
打水の土の匂ひを忘れたり
夏つばめ鳥居へ抛る海の石
比古太郎尾根を踏まへて湧き上る
沙羅の花落さず英彦の通り雨
自轉車連ね狐踊りの化粧の子
リヤカーに踊り疲れの子狐連

埼玉　服部早苗

黒絵の具ぎゆつと夏蝶描きけり
美しき夜の星と引きあふ甲虫
炎昼やマイナス螺子の浮きあがり
エルメスの騎士像に触れ夏の月
すいと貌よけて金魚のすれちがふ
滝しぶき神のにほひと思ひけり
杼のごとく樹間を縫へり夏の蝶
柚味噌や枕合はぬも旅情なる

北九州　深川淑枝

川黒くうしろ流るる夏神楽
ぱりぱりと伸ばす提灯祭来る
祭笛夕べの水に風の湧き
束鮒の伏す藻そよりと半夏生
腥き水引きずつて藻刈舟
蛇衣を脱ぎそそり立つ野面積
夕さりの筬音もるる青簾
海遠くひかり上布の織り上がる

広島　戸栗末廣

さくらんぼ口をすぼめて迎へけり
夏蝶や兄の遺しし一軍記
薄衣日暮れのビルへ消えゆける
沖見ゆる櫓に一列つばめの巣
よろこんで地べたを叩く夕立かな
油虫追ひつめられて飛びにけり
滝壺の水の極楽浄土かな
子つばめに空の愉しさいかばかり

PDF= 俳誌の salon

福岡　角野良生

満身の棘の動きて海胆動く
落し文三下半に違ひなし
いのち綱夫に握らせ海女潜る
糸柳水面の影と繋がりて
早苗田に正座なしたる阿蘇五岳
木下闇思ひしほどの闇ならず
暑ささへはんなりと言ふ都びと
ぐいと一と伸び夏草も少年も

福岡　永淵惠子

朝涼や物音のなき塗師の町
分業の工房長屋麻のれん
工房は漆の匂ひ土用あい
金箔を吹いて伸ばせる涼しさよ
朝市果つ灼けしテントを巻きこんで

長崎　坂口晴子

流灯や浦上川は灯の帯に
花柄の忘れ杖ある平和祭
長崎忌丘のあちこち灯の点る
パイプ椅子端から埋まる平和祭
何となく遠出つつしむ浦上忌

福岡　秋津令

光より飛び出して来る日焼の子
恂々と菊重ねゆく八月よ
ごきぶりを危めし猫と夜は寝る
かき氷食べて忘るる怒りかな
とりどりの冷酒を試すひとりの夜

岡垣　田中とし江

鳰の子の親の水輪に入りにけり
水広きところへ鳰が子を連れて
街道や機織る音のして涼し
シャンデリア映すロビーの作り滝
川床料理和泉式部の話など

PDF= 俳誌の salon

長崎　仲里奈央

青梅や些細なことに傷つきて
はぐれてもゆつくり歩む菖蒲園
梅雨に入る六たす三で躓く子
七歳の最良の日や朝の虹
会へばまた恋してしまふソーダ水

太宰府　山本則男

人よりも飾られてをり祭牛
かき氷最初の匙の入れどころ
墓になほ兵の階級灼けてをり
遠泳の水を脱ぎ捨て上がり来し
被爆地のどこを踏んでも灼けてをり

京都　天谷翔子

万緑や拾へばほろと骨崩れ
水打つて玉砂利ひとつひとつ映ゆ
貸したきにハンカチーフに染みひとつ
さつきから考へてゐるらしき蟻
うすものに仕立てあげたき蛇の衣

粕屋　吉田葎

一升瓶回し飲みして神輿発つ
瓦一枚落して曲る大蛇山車
放蕩を尽くしたるごと祭果つ
帰省せし兄の鞄の重さかな
枇杷をもぐ鶏小屋に足をかけ

北九州　河原敬子

白蓮の外の花びらうすみどり
池おほふ勢ひとなりぬ布袋草
獣めく新樹の森のうねりかな
涼しさや小川は草に埋もれて
蜂の巣のいびつに太りゆく大暑

粕屋　秋千晴

ねぢり花人さし指でたどりたり
野球帽の鍔擦れてをり日焼の子
まだ象に揺られてゐたる昼寝覚
観客の団扇の止まる大相撲
放生会何か買ひたくなる子供

糸島　小林朱夏

参勤交代のごとく帰省せり
踊り髪ほどきて母に戻りけり
どこまでも付いていきたし赤とんぼ
麻酔医の薄き唇曼珠沙華
蜩や合せ鏡で探す傷

兵庫　青木朋子

紫陽花にはさまれてゐる地蔵堂
木曽川に沿ふ山並や夏の霧
木曽谷に水迸る帰省かな
しばらくは猫が端居に連なれり
かなかなや目を病む夢の恐ろしく

PDF= 俳誌の salon